九詩研会 第十三回例会（平成二十九年九月十四日）
原田睦夫氏詩「題九成宮醴泉銘」
参考資料

25 九成宮醴泉銘—海内第一本—（宋拓） 欧陽詢 唐時代・貞観六年（六三二）
帖首

25 九成宮醴泉銘（きゅうせいきゅうれいせんめい）—海内（かいない）第一本—（宋拓） 欧陽詢 一帖

唐時代・貞観六年（六三二）
紙本墨拓 縦二八・六 横一五・四
鄧文原・伍睫庵・端方旧蔵

九成宮とは唐代王室の離宮のことで、今の陝西省西安の西北一五〇kmに位置する麟遊県の深い天台山中にある。もとは隋の文帝（楊堅）の造営した仁寿宮であったが、唐の太宗がこれを修復して名を九成宮と改め、太宗・高宗らはここに避暑し、長期にわたり滞在した。九成宮は規模雄大であったが、何といっても高所にあるため、もともと水源に乏しいという欠点があった。貞観六年（六三二）、太宗は皇后を伴い離宮内を散歩中、偶然にも西方一隅に潤いのあるところを発見した。杖でつつくときれいな水が滾々と湧き出てくる。この醴泉の出現は唐朝の徳に応ずる一大祥瑞であると感じ、帝はすぐさま記念碑の建立を命じた。碑銘は、「貞観の治」の功臣として著名な魏徵（五八〇～六四三）が勅を奉じて撰し、これを欧陽詢が書丹した。魏徵五三歳、欧陽詢七六歳の時である。

欧陽詢の碑書は二〇余種を数えるが、勅を奉じての揮毫はこの九成宮のみである。整本を見ると碑文は全二四行、毎行四九字、全一一〇八文字で、上部に篆額を冠し、「九成宮醴泉銘」六字が二行に陽刻され、井格を以て囲っている。本文は彼の碑書の中では比較的字粒が大きく、一字の天地約二～三㎝、縦長な字形の整斉さは見事というほかなく、用筆・結体に狂いがなく、その点画はひきしまっている。

三井文庫別館蔵品図録
聽氷閣旧蔵碑拓名帖撰
―新町三井家―
平成十年四月　発行
編集発行　財団法人　三井文庫
〒164-0002　東京都中野区上高田五―一六―一
TEL　〇三―三三八七―二二一一
印　刷　株式会社　便利堂